

## 学生による授業評価(Ⅲ)

——科目分類, 学年, 出席状況による結果の相違——

冷水啓子

キーワード：学生による授業評価, 評価結果の相違, 結果の解釈,  
影響要因, 結果の公表

### Ⅰ 問題

社会学部自己評価委員会が作成し実施してきた「授業科目アンケート」(学生による授業評価)は, 文学部の場合と同様に, 社会学部 FD 活動の一環として1998年度から始められ, 2002年度秋学期から本学自己評価委員会による全学的な授業評価の実施に伴い, 同年度春学期でその使命を終えることになった。

筆者は, 2002年度に文学部から社会学部へ移籍したため, 本学部最後の春学期調査に参加することができた。そこで, 今まで文学部で調査対象としてきた教職課程関連科目の「教育心理学01・02」に加え, 共通自由科目の「心理学01」においても初めて調査を行った。また, 質問内容が社会学部と文学部で若干異なるため, 文学部にはなかった調査対象者の個人情報に関するものとして, 学年や授業への出席状況についてのデータを新たに取りることができた。そこで, 今回は, 先に発表された「学生による授業評価」に関する2つの拙稿<sup>1)2)</sup>とは視点を変え, 「教育心理学01・02」と「心理学01」, すなわち教職課程関連科目と共通自由科目間における結果の相違や, 履修者の学年と

出席状況による相違に着目して分析を行った。そして、それらの要因が評価結果へ及ぼす影響を重点的に検討して報告する。

## II 方法

### 1. 調査対象科目の概要

1) 2002年度「教育心理学01・02」(以下、「02教育心理学01・02」と記す)

(i)この科目は、本学教職課程関連科目のなかの「教職に関する科目」(随意科目)として位置づけられている。全学部・学科にわたる教職課程履修生を対象とする必修科目の一つであり、2年次生から履修することができる。2002年度も、履修生のすべてが2～3年次で受講できるよう、「教育心理学01」(以下、「01クラス」と呼ぶ)と「教育心理学02」(以下、「02クラス」と呼ぶ)の2クラスを春学期に開講した<sup>3)</sup>。したがって、3年次以上では再履修者の割合が高くなる。また、両クラスでは、開講曜日・時間帯、期間中の総コマ数、履修登録者数、学年およびその所属学科などに多少の違いはあるが、担当者としてはほぼ同様な条件で授業を行うよう留意している。

その学習目標は、「幼児、児童および生徒の心身の発達および学習の過程」に関する基礎的理論と教育実践について検討し、教師としての実践的指導力を身につけるための基礎作りを目指すことである。そして、学期を通じ、主に講義形式で授業を行った。

また、2002年度に使用した教室はマルチメディア対応の3-206教室であり、両クラスの授業時限と履修登録者数は次のとおりである。

01クラス(水Ⅲ):110名, 02クラス(木Ⅴ):70名

- 
- 1) 冷水啓子「学生による授業評価—マルチメディア教材利用, 授業内容, 授業形態, 履修者数が及ぼす効果—」桃山学院大学人間科学, 第22号, 2001年, 141-168頁
  - 2) 冷水啓子「学生による授業評価(Ⅱ)—1997~2001年度間の評価結果の変容—」桃山学院大学人間科学, 第24号, 2002年, 印刷中
  - 3) 2002年度の Semester 制の導入に伴い, 2003年度からは春・秋学期で各1クラスずつ開講する予定である。

(ii)授業では、指定教科書の使用と授業に関連する印刷資料配付の他、マルチメディア機器を利用して教材提示を行った。毎回教室に備えられているコンピュータ提示システムと学内LANを利用した。教卓にある集中コントローラを操作し、教卓のパソコン、OHC、VTRなどを通じて視聴覚資料を適宜提供した。授業に関連する図表やテキスト情報は、コンピュータのプレゼンテーション・ソフト(Microsoft PowerPoint for Windows)で作成したスライドによって提供した。このスライド・ファイルは、大学計算機サーバー上にある“Nile2”の“Lesson(S)”という共用ドライブのなかに設けた筆者専用のフォルダー内に一時保存した。筆者が授業中に利用するだけでなく、学生が情報センターの実習室で自由に閲覧できるように配慮した<sup>4)</sup>。

さらに、この科目では開講当初に出席を重視する由履修者へ伝えてあるため、毎回授業開始時に出席カード(B6サイズ)を配り、授業内容に関するコメントを記入して授業終了時に提出してもらった(次の授業の冒頭で少し時間を割いてそれらの講評を行った)。成績評価は、学期中に提出を求めたレポートや学期末に実施した論述試験、出席状況、および出席カードへの記入内容などの結果に基づき、総合的に行った。

## 2) 2002年度「心理学01」(以下、「02心理学01」と記す)

(i)この科目は、2002年度に改訂・実施された新カリキュラムでは社会学部提供の共通自由科目として位置づけられており、1年次から履修することができる。また、教職課程関連科目として中学社会科および高校公民科の選択必修科目となっている<sup>5)</sup>。

---

4) このフォルダー内の各ファイルの内容については、本学情報センターにID登録されている当該科目履修者であればだれでも自由に閲覧できるが、閲覧者が勝手に書き換えや削除などができないような安全策がとられている。また、著作権上の問題から、文献やインターネット・ホームページなどから引用した図表はスライドから削除した。

5) この「心理学」は、例年履修者が多いため複数クラスが開講されている。2002年度は5クラスが開講された。

その学習目標は、近年の心理学研究上のさまざまな知見・成果を概観し、人間の心のしくみとはたらきについて総合的に理解していくことを目指すことである。「発達」や「人格・性格」のように「教育心理学」と重複する単元もあり、学期を通じて主に講義形式で授業を行うなど、双方の科目の特性には共通点も多い。

また、2002年度はマルチメディア対応の3-211教室で毎週2回（月Ⅲ，木Ⅲ）授業を行い、履修登録者数は259名であった。

(ii)授業では、教育心理学の場合と同様に、指定教科書の使用と授業に関連する印刷資料配付の他、マルチメディア機器を利用して教材提示を行った。毎回教室に備えられているコンピュータ提示システムと学内LANを利用した。教卓にある集中コントローラを操作し、教卓のパソコン、OHC、VTRなどを通じて視聴覚資料を適宜提供した。授業に関連する図表やテキスト情報は、コンピュータのプレゼンテーション・ソフト（Microsoft PowerPoint for Windows）を使って作成したスライドによって提示した。このスライド・ファイルは、大学計算機サーバー上にある“Nile2”の“Lesson(S)”という共用ドライブのなかに設けた筆者専用のフォルダー内に保存した。ただし、この講義では、筆者が授業中に利用したファイルは学生には公開しなかった。なぜならば、このクラスの履修生の過半数が1年次生であり、彼らの多くはコンピュータ操作に不慣れで、かつネットワーク・リテラシーに関する知識も十分に習得していないであろうと思われたからである。

## 2. 調査の実施

両科目3クラスでの調査は、それぞれ2002年7月の第1週目に行われた学期末テストの前に実施された。

## 3. 調査結果の分析方法

今回分析した素データ・ファイルは、社会学部自己評価委員会から提供さ

Table 1 「2002年度 社会学部 授業科目アンケート」の質問項目内容

番号	質問内容	質問項目名	選択肢	配点
問3	この授業についてあなたの出席状況はどうでしたか	出席値	1 ほとんど毎回出席している 2 半分以上は出席している 3 半分以下しか出席していない 4 ほとんど出席していない	3 2 1 0
問4	この授業についてあなたの満足度は全体的にどうでしたか	満足値	1 満足している 2 どちらかと言えば満足している 3 どちらかと言えば不満である 4 不満である 5 わからない	3 2 1 0 欠損値
問5	講義計画を見て期待したとおりの内容だったと思いますか	講義値	1 そう思う 2 どちらかと言えばそう思う 3 どちらかと言えばそう思わない 4 そう思わない 5 わからない	3 2 1 0 欠損値
問6	興味・関心のもてる内容だったと思いますか	興味値	同上 1～5	同上
問7	講師の説明が上手でわかりやすかったと思いますか	説明値	同上 1～5	同上
問8	講師の話し方が明瞭でよく聞き取れたと思いますか	話し方値	同上 1～5	同上
問9	授業の中で講師による不愉快な言動はなかったと思いますか	言動値	同上 1～5	同上
問10	板書は見やすかったと思いますか	板書値	同上 1～5	同上
問11	機器の使い方が上手だったと思いますか	機器値	同上 1～5	同上
問12	私語が少なく授業が受けやすかったと思いますか	私語値	同上 1～5	同上

れた<sup>6)</sup>。これらのデータを、SPSS (Ver.10) とExcel 2000 を用いて統計的に処理するため、問3～12の各質問項目において、選択肢の「1」「2」「3」「4」に対して順に「3点」「2点」「1点」「0点」と配点を行った。そして

6) 今回の調査結果の分析に際し、社会学部自己評価委員会から当該のデータ・ファイルを快くご提供いただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

「5 わからない」は欠損値として分析から除外した。

なお、「2002年度社会学部授業科目アンケート」で使われた質問項目（問3～12）および各回答選択肢とその配点（評価得点）については、Table 1で示すとおりである。

このような数値データに基づき、「02教育心理学01・02」と「02心理学01」の2科目について、1. 調査対象者の分布と出席状況、2. 質問項目間の相関分析、3. 各質問項目評価得点平均値に関する分析（2科目間の比較）、4. 学年・出席状況による各質問項目評価得点平均値の違い、の順に比較検討を行った。

### III 結果

#### 1. 調査対象者の分布と出席状況

今回の調査対象となった「02教育心理学01」と「02教育心理学02」における各質問項目評価得点平均値および10質問項目個人平均値の結果を見ると、すべての質問項目と個人平均値で統計的な有意差は認められなかった（Table 9を参照のこと）。そのため、主な分析は二つのクラスを合算した「02教育心理学01・02」で行った。「02教育心理学01・02」と「02心理学01」における調査対象者の所属学部の分布についてはTable 2に、学年の分布についてはTable 3に、科目別の出席状況はTable 4にまとめて表した。

なお、「02心理学01」では、最終授業時に実施した学期末試験の開始20分前に筆者が一人で調査を開始したが、途中で質問用紙が足りなくなったり用紙の配布や回収に手間取ったりと、いろいろ不手際が生じた。そのため、当日出席した全員（244名）から回答を得ることができず、回答用紙の回収率は50%近くまで低下した。また、データの信頼性を高めるため、両科目において、問3で「ほとんど出席していない」とし、かつ、問4～12のすべての項目で「5 わからない」と答えた数名のデータは分析より除外した。その結果、「02教育心理学01・02」では計157名、「02心理学01」では計123名のデー

Table 2 科目別所属学部のカテゴリ

			学 部						合 計
			社会学部	経済学部	経営学部	文学部	法学部	その他	
科目分類	02教育心理学 01・02	度数	43	43	25	44		2	157
		科目分類の%	27.4%	27.4%	15.9%	28.0%		1.3%	100.0%
	02心理学01	度数	31	36	16	15	25		123
		科目分類の%	25.2%	29.3%	13.0%	12.2%	20.3%		100.0%
合 計		度 数	74	79	41	59	25	2	280

Table 3 科目別学年のカテゴリ

			学 年						合 計
			1年	2年	3年	4年	5年以上	その他	
科目分類	02教育心理学 01・02	度数		107	45	3		2	157
		科目分類の%		68.2%	28.7%	1.9%		1.3%	100.0%
	02心理学01	度数	95	11	10	2	5		123
		科目分類の%	77.2%	8.9%	8.1%	1.6%	4.1%		100.0%
合 計		度 数	95	118	55	5	5	2	280

Table 4 科目別出席状況

			出 席 状 況				合 計
			ほとんど 毎回	半分以上	半分以上 以下	ほとんど 欠席	
科目分類	02教育心理学 01・02	度数	133	18	5	1	157
		科目分類の%	84.7%	11.5%	3.2%	0.6%	100.0%
	02心理学01	度数	58	43	12	10	123
		科目分類の%	47.2%	35.0%	9.8%	8.1%	100.0%
合 計		度 数	191	61	17	11	280

タについて分析を行うことになった。

また、問4～12の各質問項目で「5わからない」を選択した場合、統計的処理を行う際は欠損値として扱ったが、これはその判断基準が出席状況によって異なると予想したからである。たとえば、「02心理学01」における「満足度」と「出席状況」のクロス集計表（Table 5）を見ると、「5わからない」と答えた21名のなかに、「ほとんど毎回出席」した者の12.1%（7名）と「ほとんど出席しなかった」者の60.0%（6名）が含まれていることがわかるが、この結果もその証拠となるであろう。

Table 5 「02心理学01」における「満足度」と「出席状況」のクロス表

			出席状況				合計
			ほとんど毎回	半分以上	半分以下	ほとんど欠席	
満足度	満足	度数	8	2		1	11
		満足度の%	72.7%	18.2%		9.1%	100.0%
		出席状況の%	13.8%	4.7%		10.0%	8.9%
	どちらかといえば満足	度数	26	18	2		46
		満足度の%	56.5%	39.1%	4.3%		100.0%
		出席状況の%	44.8%	41.9%	16.7%		37.4%
	どちらかといえば不満	度数	11	13	6	1	31
		満足度の%	35.5%	41.9%	19.4%	3.2%	100.0%
		出席状況の%	19.0%	30.2%	50.0%	10.0%	25.2%
	不満	度数	6	3	3	2	14
		満足度の%	42.9%	21.4%	21.4%	14.3%	100.0%
		出席状況の%	10.3%	7.0%	25.0%	20.0%	11.4%
わからない	度数	7	7	1	6	21	
	満足度の%	33.3%	33.3%	4.8%	28.6%	100.0%	
	出席状況の%	12.1%	16.3%	8.3%	60.0%	17.1%	
合計		度数	58	43	12	10	123
		満足度の%	47.2%	35.0%	9.8%	8.1%	100.0%
		出席状況の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



## 2. 科目別質問項目間の相関分析

1) まず, Table 6 の「02教育心理学01・02」の結果を見ると, 「出席値」との間で有意な正の相関係数値を示す質問項目はなかった。しかし, その「出席値」を除いた9つの質問項目間では, 「興味値」と「言動値」間, 「板書値」と「私語値」間を除く残りすべてのペアで, 相関係数値が5%あるいはそれ以下の水準で有意となった。

また, 「02心理学01」の結果をまとめた Table 7 によると, 「出席値」との間で相関係数値が5%あるいはそれ以下の水準で有意となった質問項目は, 「満足値」「話し方値」「言動値」「機器値」の4つで, 「出席値」と他の項目との間で有意な正の相関がまったくなかった「02教育心理学01・02」とは異なる。さらに, 「出席値」を除いた9つの質問項目のうち, 「満足値」と「言動値」間, 「講義値」と「言動値」間, 「講義値」と「板書値」間, 「私語値」と「話し方値」間, 「私語値」と「言動値」間, 「私語値」と「板書値」間, の6つを除いた残りすべてのペアで, 相関係数値が5%あるいはそれ以下の水準で有意となった。

## 2) 「02心理学01」における因子分析結果

「02心理学01」について10質問項目間の関係を明らかにするために, 因子分析(主因子法で処理した後, Kaiser の正規化を伴うバリマックス法による因子軸の回転)を行った。その結果, 4つの因子が抽出された(Table 8)。すなわち, それぞれの因子に大きな因子負荷をもつ質問項目を列挙すると, 第Ⅰ因子では「満足値」「講義値」「説明値」「興味値」, 第Ⅱ因子では「板書値」「機器値」「話し方値」「言動値」, 第Ⅲ因子では「出席値」, そして第Ⅳ因子では「私語値」であった。

## 3. 各質問項目評価得点平均値に関する分析(2科目間の比較)

Table 9 は, 「02教育心理学01・02」と「02心理学01」について, 各質問項

Table 6 「02教育心理学01・02」各質問項目評価得点の相関係数

出席値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	1.000 . 157																		
満足値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.028 .738 148	1.000 . 148																	
講義値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.016 .865 116	.667(**) .000 114	1.000 . 116																
興味値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	-.051 .527 154	.552(**) .000 145	.510(**) .000 114	1.000 . 154															
説明値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.014 .865 152	.744(**) .000 145	.638(**) .000 113	.488(**) .000 149	1.000 . 152														
話し方値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	-.040 .626 154	.455(**) .000 146	.573(**) .000 114	.301(**) .000 151	.639(**) .000 152	1.000 . 154													
言動値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.032 .697 150	.190(*) .024 142	.472(**) .000 112	.124 .135 147	.213(**) .010 146	.330(**) .000 147	1.000 . 150												
板書値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.033 .734 106	.506(**) .000 101	.331(**) .002 82	.239(*) .014 106	.451(**) .000 103	.300(**) .002 104	.269(**) .006 102	1.000 . 106											
機器値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.047 .563 154	.395(**) .000 146	.382(**) .000 115	.242(**) .003 151	.400(**) .000 149	.376(**) .000 151	.418(**) .000 147	.530(**) .000 104	1.000 . 154										
私語値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	-.128 .112 155	.232(**) .005 148	.242(**) .009 116	.168(*) .038 152	.194(*) .017 151	.199(*) .014 152	.231(**) .005 149	.111 .258 105	.242(**) .003 152	1.000 . 155									
		出席値	満足値	講義値	興味値	説明値	話し方値	言動値	板書値	機器値	私語値									

\*\*相関係数は1%水準で有意(両側)

\*相関係数は5%水準で有意(両側)

Table 7 「02心理学01」各質問項目評価得点の相関係数

出席値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	1.000 . 123																			
満足値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.280(**) .004 102	1.000 . 102																		
講義値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.156 .125 98	.612(**) .000 87	1.000 . 98																	
興味値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.114 .224 115	.606(**) .000 100	.497(**) .000 97	1.000 . 115																
説明値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.115 .240 106	.695(**) .000 93	.544(**) .000 90	.522(**) .000 102	1.000 . 106															
話し方値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.185(**) .045 118	.343(**) .000 102	.233(*) .023 96	.205(*) .030 112	.486(**) .000 105	1.000 . 118														
言動値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.256(**) .006 115	.074 .473 96	-.066 .527 95	.263(**) .006 110	.274(**) .006 100	.281(**) .003 111	1.000 . 115													
板書値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.127 .192 107	.247(*) .020 89	.148 .170 87	.243(*) .014 101	.340(**) .001 93	.476(**) .000 104	.240(*) .016 101	1.000 . 107												
機器値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.206(*) .025 118	.472(**) .000 100	.268(**) .008 98	.351(**) .000 112	.484(**) .000 105	.491(**) .000 116	.360(**) .000 111	.537(**) .000 103	1.000 . 118											
私語値	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	-.074 .427 116	.275(**) .006 100	.219(*) .033 95	.215(*) .023 112	.244(*) .014 102	.098 .301 113	-.002 .987 111	-.022 .827 102	.195(*) .039 113	1.000 . 116										
		出席値	満足値	講義値	興味値	説明値	話し方値	言動値	板書値	機器値	私語値										

\*\*相関係数は1%水準で有意(両側)

\*相関係数は5%水準で有意(両側)

Table 8 回転後の因子負荷量  
(主因子法, Kaiser の正規化を伴うバリマックス法)

	I	II	III	IV	共通性
満足値	.815	.213	.227	.203	.802
講義値	.745	.055	.048	.053	.564
説明値	.680	.396	.022	.189	.656
興味値	.625	.198	.048	.136	.450
板書値	.158	.752	-.015	-.191	.626
機器値	.275	.696	.160	.243	.644
話し方値	.240	.599	.105	.050	.429
言動値	-.018	.418	.308	.135	.288
出席値	.141	.123	.678	-.121	.510
私語値	.250	.030	-.091	.435	.261
因子寄与	2.314	1.842	.657	.418	5.231
因子寄与率 (%)	23.14	18.42	6.57	4.18	52.31

目の評価得点平均値および標準偏差と、10質問項目個人平均値のグループ平均および標準偏差を表したものである。10項目の個人平均値を求めるに際し、その個人合計得点について信頼性分析を行ったところ、143ケースを対象に算出した Cronbach の  $\alpha$  係数の値が0.828となり高い信頼性が示された。さらに Table 9 に基づく各質問項目評価得点平均値をわかりやすく図示するために Fig. 1 を作成した。

なお、次の Fig. 1 からはじまるすべての結果に関する図表では、5%あるいはそれ以下の水準で統計的に有意な差が検出された質問項目名の後に、有意水準を示す \* 印を1個～3個付した (\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$ )。また、5%水準では有意でないが、10%水準で差が認められたものに  $\dagger$  印を付した。

Fig. 1 を見ると、「言動値」を除いた残り9項目で「02教育心理学01・02」

Table 9 「02教育心理学01・02」と「02心理学01」の各質問項目評価得点平均値および10質問項目個人平均得点

質問項目	02教育心理学01・02								02心理学01		
	クラス	N	平均値	標準偏差	クラス	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差
出席値	01	91	2.78	0.57	全体	157	2.80	0.51	123	2.21	0.93
	02	66	2.83	0.41							
満足値	01	88	1.85	0.85	全体	148	1.86	0.85	102	1.53	0.86
	02	60	1.88	0.85							
講義値	01	72	2.07	0.84	全体	116	2.08	0.80	98	1.50	0.93
	02	44	2.09	0.74							
興味値	01	89	2.17	0.82	全体	154	2.16	0.83	115	1.50	0.95
	02	65	2.14	0.85							
説明値	01	88	1.70	0.98	全体	152	1.78	0.98	106	1.60	0.92
	02	64	1.88	0.97							
話し方値	01	89	2.16	0.95	全体	154	2.23	0.95	118	2.02	0.84
	02	65	2.32	0.94							
言動値	01	88	2.75	0.65	全体	150	2.77	0.62	115	2.84	0.47
	02	62	2.79	0.58							
板書値	01	63	2.25	0.97	全体	106	2.28	0.91	107	2.21	1.02
	02	43	2.33	0.84							
機器値	01	89	2.29	0.81	全体	154	2.36	0.79	118	2.16	0.89
	02	65	2.46	0.75							
私語値	01	91	1.84	0.90	全体	155	1.86	0.91	116	1.40	1.06
	02	64	1.91	0.92							
10質問項目 個人平均得点	01	91	2.18	0.54	全体	157	2.22	0.51	116	1.89	0.57
	02	66	2.27	0.47							

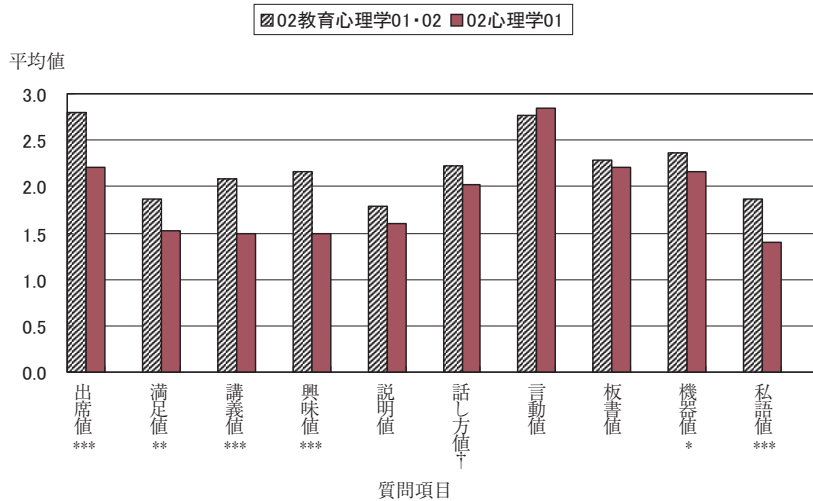


Fig. 1 「02教育心理学01・02」と「02心理学01」の各質問項目評価得点平均値

のほうが「02心理学01」よりも平均値が高い。各項目ごとに平均値の差のT検定を行ったところ、5%あるいはそれ以下の水準で有意な差を示したものは、「出席値」( $t(179.43)=6.36, p<.001$ )、「満足値」( $t(248)=3.05, p<.01$ )、「講義値」( $t(192.80)=4.80, p<.001$ )、「興味値」( $t(225.51)=5.96, p<.001$ )、「機器値」( $t(270)=1.99, p<.05$ )、「私語値」( $t(224.44)=3.82, p<.001$ )であった。5%水準では有意でないが、「話し方値」にも同様な傾向が見られた( $t(264.45)=1.94, p<.10$ )。さらに、10項目の個人平均値でも「02教育心理学01・02」のほうが「02心理学01」よりも有意に高いことがわかった( $t(278)=5.08, p<.001$ )。

#### 4. 学年・出席状況による各質問項目評価得点平均値の違い

##### 1) 学年による違い

Table 10 は、「02教育心理学01・02」の学年別（2年次，3年次，4年次以上の3群）の各質問項目評価得点平均値および標準偏差を表したものであ

Table 10 「02教育心理学01・02」学年別質問項目評価得点平均値

		度数	平均値	標準偏差
出席値*	2年	107	2.85	0.41
	3年	45	2.76	0.57
	4年以上	5	2.20	1.30
	合計	157	2.80	0.51
満足値	2年	101	1.78	0.80
	3年	42	2.00	0.94
	4年以上	5	2.40	0.89
	合計	148	1.86	0.85
講義値	2年	75	2.05	0.75
	3年	36	2.06	0.92
	4年以上	5	2.60	0.55
	合計	116	2.08	0.80
興味値	2年	105	2.17	0.78
	3年	44	2.14	0.95
	4年以上	5	2.00	0.71
	合計	154	2.16	0.83
説明値	2年	103	1.73	0.95
	3年	44	1.86	1.05
	4年以上	5	2.00	1.00
	合計	152	1.78	0.98
話し方値	2年	104	2.21	0.95
	3年	45	2.22	0.97
	4年以上	5	2.60	0.55
	合計	154	2.23	0.95
言動値	2年	103	2.77	0.61
	3年	42	2.76	0.66
	4年以上	5	2.80	0.45
	合計	150	2.77	0.62
板書値	2年	81	2.28	0.88
	3年	21	2.33	0.97
	4年以上	4	2.00	1.41
	合計	106	2.28	0.91
機器値	2年	104	2.35	0.75
	3年	45	2.38	0.91
	4年以上	5	2.60	0.55
	合計	154	2.36	0.79
私語値*	2年	105	1.80	0.87
	3年	45	1.91	0.97
	4年以上	5	2.80	0.45
	合計	155	1.86	0.91

Table 11 「02心理学01」 学年別質問項目評価得点平均値

		度数	平均値	標準偏差		度数	平均値	標準偏差
出席値	1年	95	2.24	0.96	話し方値	90	2.00	0.85
	2年	11	2.36	0.67		11	2.00	0.89
	3年	10	1.90	0.74		10	2.00	0.82
	4年以上	7	2.00	1.00		7	2.29	0.76
	合計	123	2.21	0.93		118	2.02	0.84
満足値†	1年	75	1.44	0.86	言動値	90	2.84	0.50
	2年	10	1.50	0.97		9	2.89	0.33
	3年	10	1.70	0.82		9	2.78	0.44
	4年以上	7	2.29	0.49		7	2.86	0.38
	合計	102	1.53	0.86		115	2.84	0.47
講義値*	1年	74	1.35	0.93	板書値	82	2.17	1.04
	2年	9	1.89	0.93		10	2.00	1.25
	3年	8	1.75	0.71		8	2.50	0.76
	4年以上	7	2.29	0.76		7	2.57	0.53
	合計	98	1.50	0.93		107	2.21	1.02
興味値**	1年	87	1.33	0.95	機器値	91	2.16	0.90
	2年	11	1.91	0.94		10	2.30	0.95
	3年	10	1.90	0.57		10	1.90	0.99
	4年以上	7	2.29	0.76		7	2.29	0.49
	合計	115	1.50	0.95		118	2.16	0.89
説明値†	1年	81	1.49	0.94	私語値	89	1.47	1.08
	2年	9	1.78	0.97		11	1.09	1.22
	3年	10	1.90	0.74		9	0.89	0.60
	4年以上	6	2.33	0.52		7	1.57	0.98
	合計	106	1.60	0.92		116	1.40	1.06

る。それらのデータについて、学年要因に基づく一元配置の分散分析とその後の多重比較検定を行った（ただし、多重比較検定では、Leven 統計量に基づきグループの等分散性の検定をした後、等分散が仮定される場合は Tukey の HSD 検定を用い、仮定されない場合は Tamhane の T2 検定を用いて、5%水準で有意な差のあるペアを抽出した）。その結果、「出席値」( $F(2,154)$



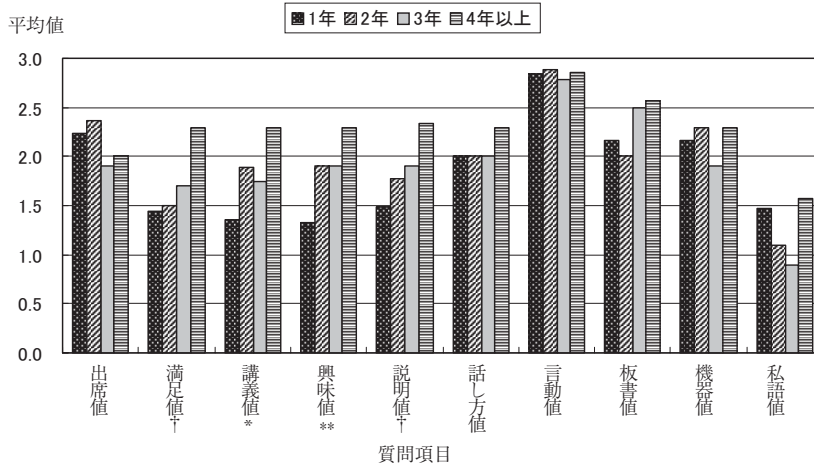


Fig. 2 「02心理学01」 学年別質問項目評価得点平均値

=4.30,  $p < .05$ ; Tamhane の T2 によると有意なペアはなかった) では学年が高くなるにつれて有意に平均値が下がる傾向が認められ, 逆に「私語値」( $F(2,152)=3.08, p < .05$ ; Tukey の HSD によると 2 年次と 4 年次以上間で有意) では学年が高くなるにつれて有意に平均値が上がる傾向が認められた。

次に, Table 11 は, 「02心理学01」の学年別(1年次, 2年次, 3年次, 4年次以上の4群)の各質問項目評価得点平均値および標準偏差を表したものである。それらの結果をもとにして作成した Fig. 2 によると, 「満足値」「講義値」「興味値」「説明値」で, 学年が高くなるにつれて平均値が上がっていく傾向が見られる。学年要因に基づく一元配置の分散分析とその後の多重比較検定を行ったところ, 「講義値」( $F(3,94)=3.19, p < .05$ ; Tukey の HSD によると 1 年次と 4 年次以上間で有意)と「興味値」( $F(3,111)=4.07, p < .01$ ; Tamhane の T2 によると有意なペアはなかった)が有意となった。さらに, 「満足値」( $F(3,98)=2.27, p < .10$ )と「説明値」( $F(3,102)=2.15, p < .10$ )でも 5%

Table12 「02心理学01」出席状況別質問項目評価得点平均値

		度数	平均値	標準偏差
満足値*	ほとんど毎回	51	1.71	0.88
	半分以上	36	1.53	0.74
	半分以上	11	0.91	0.70
	ほとんど欠席	4	1.00	1.41
	合計	102	1.53	0.86
講義値	ほとんど毎回	48	1.60	0.96
	半分以上	35	1.54	0.89
	半分以上	10	0.90	0.74
	ほとんど欠席	5	1.40	1.14
	合計	98	1.50	0.93
興味値	ほとんど毎回	54	1.59	1.02
	半分以上	41	1.46	0.84
	半分以上	12	1.33	0.89
	ほとんど欠席	8	1.25	1.16
	合計	115	1.50	0.95
説明値	ほとんど毎回	53	1.64	0.98
	半分以上	34	1.71	0.80
	半分以上	11	1.36	0.92
	ほとんど欠席	8	1.25	1.04
	合計	106	1.60	0.92
話し方値	ほとんど毎回	57	2.14	0.83
	半分以上	41	1.95	0.86
	半分以上	11	2.09	0.70
	ほとんど欠席	9	1.44	0.73
	合計	118	2.02	0.84
言動値*	ほとんど毎回	54	2.93	0.33
	半分以上	42	2.86	0.35
	半分以上	11	2.64	0.67
	ほとんど欠席	8	2.50	1.07
	合計	115	2.84	0.47
板書値	ほとんど毎回	49	2.29	0.98
	半分以上	39	2.26	0.91
	半分以上	10	1.90	1.29
	ほとんど欠席	9	1.89	1.36
	合計	107	2.21	1.02
機器値	ほとんど毎回	57	2.26	0.88
	半分以上	41	2.22	0.69
	半分以上	11	1.91	1.04
	ほとんど欠席	9	1.56	1.33
	合計	118	2.16	0.89
私語値	ほとんど毎回	55	1.35	1.09
	半分以上	41	1.39	0.95
	半分以上	11	1.45	1.13
	ほとんど欠席	9	1.67	1.41
	合計	116	1.40	1.06

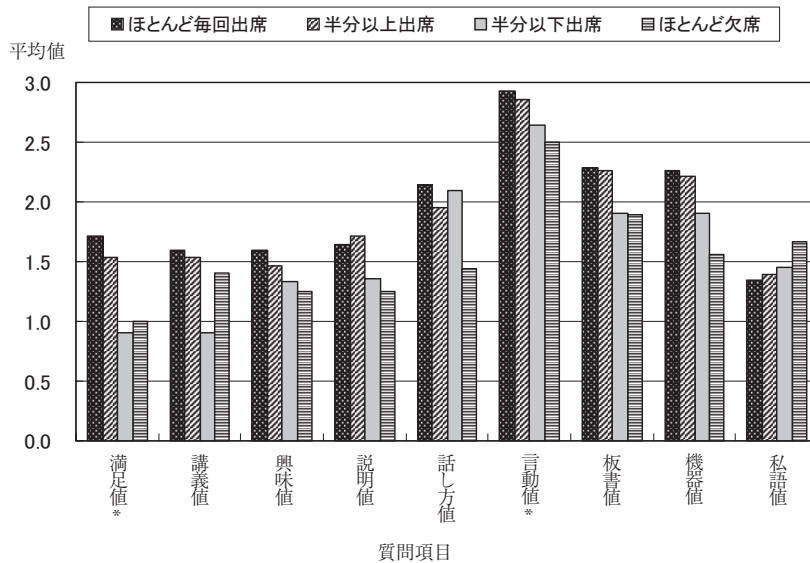


Fig. 3 「02心理学01」出席状況別各質問項目評価得点平均値

水準で有意ではないが、同様の傾向が認められた。

2) 出席状況による違い

「02教育心理学01・02」では「ほとんど毎回出席」と「半分以上出席」の割合が96%を超えており (Table 4), すべての質問項目評価得点平均値および10質問項目個人平均値において, 出席状況要因に基づく一元配置の分散分析で有意差は認められなかった。そこで, 「02心理学01」の結果のみ次に述べる。

Table 12 は, 「02心理学01」の出席状況別 (「ほとんど毎回出席」, 「半分以上出席」, 「半分以下出席」, 「ほとんど欠席」の4群) の各質問項目評価得点平均値および標準偏差を表したものである。その結果をもとにして作成した Fig. 3 によると, 「講義値」「私語値」以外では, 出席状況が悪くなるにつれ

で平均値が下がっていく傾向が見られる。出席状況要因に基づく一元配置の分散分析とその後の多重比較検定を行った（ただし、多重比較検定では、Leven 統計量に基づきグループの等分散性の検定をした後、等分散が仮定される場合は Tukey の HSD 検定を用い、仮定されない場合は Tamhane の T2 検定を用いて、5%水準で有意な差のあるペアを抽出した）。その結果、「満足値」( $F(3,98)=3.31, p<.05$ ; Tukey の HSD によると「ほとんど毎回出席」と「半分以下出席」間で有意)と「言動値」( $F(3,111)=2.83, p<.05$ ; Tamhane の T2 によると有意なペアはなかった)が有意となった。

#### IV 考察

##### 1. 調査対象者の分布と出席状況

Table 4 を見ると、「02教育心理学01・02」の出席状況は良好で、「ほとんど毎回」出席した者の割合は8割を超えている。この科目では開講当初に出席を重視する由履修者へ伝えてあり、毎回出席カードを配って出欠の記録を取っているからである。他方、「02心理学01」では履修者数が多く、出欠の記録を取っていないためか、「ほとんど毎回」出席した者は5割を切っていることがわかった。このような出席状況の傾向は、教職課程関連科目と共通自由科目間に見られる主要な相違の一つであろう。

また、Table 5 で顕著に示されたように、問4～12の各質問項目に対する「5わからない」という反応は、出席状況によってその判断基準がかなり異なるようである。「ほとんど毎回出席」したのに授業に満足したか否かが「わからない」という場合、出席していたけれど授業の満足度は明確に判断できない、すなわち、判断に迷いどちらとも言いきれないから「わからない」と答えたと予想される。あるいは、授業のなかのどのような点を捉えて満足度を評価すればよいかかわからないなど、質問の意図がよくわからないため判断できなかったものも含まれているであろう。他方、「ほとんど出席しなかった」から「わからない」場合は、授業に出ていないから答えられないと

いう意味の「わからない」であろう。したがって、この「わからない」を回答項目の一つとして残すのなら、中立的回答である「どちらとも言えない」を5肢選択の中心に置いたうえで、「わからない」はそれ以外の回答として選択肢（5つの間隔尺度）の外へ出したほうがよいと思われる。

## 2. 科目別質問項目間の相関分析

1) 「02教育心理学01・02」の場合、「出席値」との間で有意な正の相関係数値を示す質問項目はなかった (Table 6)。それは、この科目が出席重視の科目であるため、好むと好まざるとにかかわらず出席が強要される学生側の意識や態度の反映であると思われる。それ以外の9つの質問項目間ではほとんどのペアで相互に高い正の相関が見られ、これらの項目が互いに密接に関連していることが示された。

他方、「02心理学01」では、「02教育心理学01・02」とは異なり出欠を取らなかったため、「出席値」との間で有意な正の相関を表す質問項目が4つ認められた (Table 7)。そのうち、「満足値」との関係に着目してみると、よく出席していた者ほど授業に満足した、あるいは満足できる授業だからよく出席したと解釈できるであろう。また、この「満足値」は、他の質問項目との関連性も強く、とくに「講義値」「興味値」「説明値」「機器値」との間で高い正の相関をもつことがわかった。シラバスから期待したとおりの興味深い授業が行われ、視聴覚機器を効果的に利用しながらわかりやすい説明がなされた場合、授業に対する学生の満足度が高まるということであろう。それ以外の9つの質問項目間でも、全体の6分の5のペアで相互に高い正の相関が見られた。「02教育心理学01・02」の場合とほぼ同様に、これらの項目が互いに密接に関連していることが示された。

2) 「02心理学01」について、上述したような10質問項目間の関係をより明らかにするために因子分析を行った結果、4つの因子が抽出された。Table

8から、第Ⅰ因子（「満足値」「講義値」「説明値」「興味値」）は「学生の態度・理解」因子、第Ⅱ因子（「板書値」「機器値」「話し方値」「言動値」）は「教員の態度・授業方法」因子、第Ⅲ因子（「出席値」）は「学生の出席状況」因子、そして第Ⅳ因子（「私語値」）は「教員による教室管理」因子と命名することができよう。このような因子構造は、授業評価項目の作成者の意図に合致したものとなっている。

### 3. 各質問項目評価得点平均値に関する分析（2科目間の比較）

今回の分析では、2科目間で顕著な違いが見られた。Fig. 1から、「言動値」を除いた残り9項目で「02教育心理学01・02」のほうが「02心理学01」よりも一貫して平均値が高いことがわかる。教職課程関連科目である「02教育心理学01・02」と共通自由科目である「02心理学01」とでは、授業に対する学生の態度や教員の姿勢が異なるからであろう。つまり、「02教育心理学01・02」では、とくに出席が義務づけられているので学生は毎回出席するよう心がけるし、自ら希望して随意的な教職課程関連科目を履修したため当初から授業に対する期待や関心が高く、結果的に得られる満足も大きくなるからではないか。また、「02心理学01」に比して毎回の出席者数が2分の1から3分の1と少ないため、教員の目が行き届き、私語が減って教室環境がよくなることも影響を及ぼしている。

### 4. 学年・出席状況による各質問項目評価得点平均値の違い

#### 1) 学年による違い

「02教育心理学01・02」では、学年が高くなるにつれて出席状況が悪くなるが、逆に教室管理の評価が向上した（Table 10）。前者については、4年次以上になると就職活動などで忙しくなるため欠席が増えることから説明ができる。後者については理由がよくわからないが、4年次以上の人数が少ないことが影響しているかもしれない。それ以外では一貫した学年差は見られ

なかった。

他方、「02心理学01」では、「満足値」「講義値」「興味値」「説明値」で学年による顕著な違いが見られた (Table 11, Fig. 2)。すなわち、学年が高くなるにつれて、シラバスから期待したとおり興味深くわかりやすい授業が行われたと思う者が増える傾向が認められた。これは、4年次以上になるともう後がないから単位取得を目指してより真剣に受講するようになるといった態度の現れであろう。

## 2) 出席状況による違い

出席状況にばらつきのある「02心理学01」で結果を見ると、「講義値」「私語値」以外の質問項目では、出席状況がよくなるにつれて評価が高くなる傾向が見られた (Table 12, Fig. 3)。とくに「満足値」と「言動値」で顕著であった。前者では、おもしろくて満足できる授業ならよく出席するようになるという説明ができるであろうが、後者の理由はよくわからない。よく出席している場合は、毎回教員の言動を細かく観察しているから半年通じての平均像で判断することができるが、欠席が多い場合は、たまたま出席したときに目撃した言動 (断片的で偏った情報) だけで判断しようとするためこのような相違が生じたのであろうか (この傾向は別の質問項目でも同様に言えることである)。あるいは、授業に不満があるからあまり授業にでなくなったという場合では、そのような満足できない授業を続ける教員へのネガティブな感情が教員の言動全体に波及し、実際よりも低い評価がなされたということも考えられる。しかし、「授業中に講師による不愉快な言動があった」と回答したケースのうち、回答用紙の自由記述欄にその具体的理由が記入されていたものがまったくなかったので、いずれの解釈も憶測の域を超えることはできない。

## V 結 語

近年、文部科学省や大学審議会等の要請によって、各大学では教員の資質向上、いわゆるFD (faculty development) 活動を推進してきている。個々の教員の「研究活動」だけでなく、大学における「教育活動」の向上、すなわち「教育力」が重要視されるようになったため、そのような教員の教育力を客観的に測定する手段の一つとして「学生による授業評価」が実施されるようになった。

1998年(平成10年)10月26日付の大学審議会答申<sup>7)</sup>によると、「教育の質の向上のため、自己点検・評価や学生による授業評価の実施など様々な機会を通じて、継続的に大学の組織的な教育活動に対する評価及び個々の教員の教育活動に対する評価の両面から評価を行うことが重要である。その際、教室における授業及び教室外の準備学習等の指示、成績評価などの具体的実施状況を評価の対象とすることにより、単位制度の実質化と教育内容の充実を図ることが重要である」という指摘がなされている。さらに、「教育活動の評価については、教育の成果が対象となる学生の資質能力に負うところがあることなどから、研究活動の評価に比して難しい点があると考えられる。しかしながら、大学教員の中に見られる、教育よりも研究を重視する考え方を改めるとともに、教育活動をより充実させるためには、教育についても評価の対象とすることが適当である」という見地から、自己評価や学生による授業評価の実施が重要視され、その結果、「自己評価や学生の授業評価の結果が教育の改善にフィードバックされているかといった点や、シラバス作成、ファカルティ・ディベロップメントの実施、少人数教育の実施などの具体的改善方策の実施状況の評価を行う方法」を適宜導入しながら、各大学で教育方

7) 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」(1998年10月26日)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm) (2002/12/20)



法改善に取り組むべきであるという提言がなされた。

しかし、このような学生による授業評価の実施と結果の公表に関連して、教育心理学研究者からいくつか問題点が指摘されている。

たとえば、評価結果に影響を及ぼす要因として、学生の履修動機、勤勉さ、熱意などが考えられるが、同じ授業でもそのような学生側の条件の違いにより評価結果が異なってくること<sup>8)</sup>や、学習活動への自己評価が高いほど教授活動への評価が高くなる<sup>9)</sup>ことが報告されている。また、田中(1998)<sup>10)</sup>は、評価を実施する際に検討しなければならない点を二つ挙げている。第1は、評価時期についてで、評価時期が集中すると評価の仕方が適当になったり<sup>11)</sup>、評価を行う時期の違いによって評価結果が異なる項目があったり<sup>12)</sup>することである。第2は、評価項目の選定の仕方についてで、全科目で同一項目を用いるより教員の選択に任せるほうが教員自身の授業改善の意欲を高めることになるということである。

さらに、大塚(2002)<sup>13)</sup>は、構成された評価項目の信頼性や妥当性、調査実施上の信頼性や妥当性、評価結果に影響を及ぼす要因、授業評価を導入することによる学生や教員への影響など、数多く検討しなければならない事項が残されていると述べている。そのうえ、たとえ授業評価の結果を公表したとしても、評定平均値だけを管理的に利用するなら、評定平均値を上げるためのテクニックは発達しても授業そのものの改善や教員の教育力の向上には

8) 益田良子「学生による授業評価の試み—心理学の場合—」日本心理学会第59回大会発表論文集, 1995年, 430頁

9) 伊藤秀子「大学授業における自己効力(Ⅱ)—教授者の自己効力, 授業目標, 学習者の評価の関連—」日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 1997年, 505頁

10) 田中幸代「大学教員に求められる教育力向上のために—教育心理学が検討できる問題の展望—」教育心理学研究, 1998年, 第46巻, 473-483頁

11) 増田公男「『授業評価』の評価に関する調査(1)」日本心理学会第60回大会発表論文集, 1996年, 407頁

12) 益田良子「学生による授業評価の試み—実施時期による検討—」日本心理学会第60回大会発表論文集, 1996年, 408頁

13) 大塚雄作「大学教育」日本児童研究所(編)『児童心理学の進歩 2002年版』金子書房, 2002年, 269-292頁

つながらないのではないかという疑問を投げかけている。

大塚が指摘したこれらの問題点について、本稿や先の2編の拙稿<sup>14)</sup>でも詳細な検討を行ったが、そのうち評価結果に影響を及ぼす要因に関して次のような結果が見いだされた。①総合的に判断して有益な授業であったという認識が高いほど、授業に興味を覚え、授業内容もよく理解できたと思う；②学年が高くなるほど、あるいは出席状況がよくなるほど、学生の態度に関する評価結果が向上する；③授業内容や授業方法に大きな違いがなくても、クラスの人数、履修者の適性の違い、予想できない偶発的な要因によって授業評価結果が大きく変動しうる。とくに少人数クラスでの評価は相対的に高くなる；④コンピュータ実習を取り入れ、修了課題として印刷教材やプレゼンテーション作品制作を課した場合、学生の授業への関心を高めたり学習意欲を引き出したりすることができ、総合的に評価結果が向上する；⑤科目によって評価結果が異なる。教職課程関連科目のほうが共通自由科目よりも総合的に評価が高くなり、講義科目よりも実習を導入した科目のほうが高くなる。

一般に、このような学生による授業評価の実施には、次のような2点で成果が期待できよう。第1は、教員が担当する科目における教育目標の達成にその教授法が適切であったか否かに関する確認・点検資料の一つとして利用することができるという点。第2は、学生に授業評価をさせることによって学生に一層の学習意欲を喚起し、授業の構成員として主体的に授業へ参加しようとする自覚を持たせることができるという点である<sup>15)</sup>。

しかし、このような授業評価を導入することによる学生や教員への影響についての問題は、まだ組織的な研究は行われていない。それらは残された重要な課題として、今後の研究の進展が望まれる。

本稿は、本学全体から見ればごく一部の特定科目について検討しただけのもので、ここで得られた結果がどこまで一般化可能かは定かでない。し

---

14) 前掲稿1), 2)

15) 前掲稿1), 164頁

かし、あえてその結果を報告することによって、学生による授業評価の実施と結果の公表に対する一つの視座を提供し、基本的な問題提起を行いたいと考えた。本学では、2002年度秋学期から大学自己評価委員会による全学的な授業評価調査が開始され、現在はその第1回調査結果の公表待ちの段階にある。これからも大学自己評価委員会を中心にして、慎重に議論を重ねながら本調査を推進させていく必要がある。実態からかけ離れた不適切な結果内容が一人歩きするというのではなく、この調査が本学における教育力の向上や授業改善ための有効な手段の一つとして発展していくことを願っている。

## Student Evaluations of Teaching (Ⅲ): Different Results Depending on Course Category, Grade, and Attendance Rate

Keiko SHIMIZU

This study was designed to analyze the results of student evaluations of teaching in two classes offered at this university: a non-credit teacher-training course (Educational Psychology) and an elective, general-education course (Psychology) in the spring term of the academic year 2002. The questionnaire, including twelve items, was developed by the Faculty of Sociology and has been used since 1998. Statistical analysis revealed several variables affecting student evaluations of teaching in these classes including course category, grade, and attendance rate.

The study demonstrated that there was a significant difference in the evaluative scores between Educational Psychology and Psychology. Statistical analysis revealed that the mean scores in almost all evaluation items in the Educational Psychology class were significantly higher than in the Psychology class. Additionally, most evaluative scores in the Psychology class improved significantly with both higher grades and attendance rates.

These findings could be an informative guide to the appropriate way to apply the results of student evaluations of teaching and to improve teaching methods in the future.

**Key words:** Student evaluations of teaching, Differences in evaluation results, Interpretation of results, Factors affecting, Announcement of results